

# 岐阜の街を本で豊かに

活字離れが進み、インターネットの普及により家にいながら簡単に本が買えるようになったことで街の本屋さんが次々と閉店していく昨今。今回はその中で、本が持つ魅力を信じ、楽しさを伝えたいとの想いから、本との出会いを演出している菊川の市川由加里さんにお話を伺いました。

菊川  
市川 由加里さん



## 「とある一冊の本」

市川さんは幼少期から本に慣れ親しんできました。「読むことは勿論、触れること、装丁の雰囲気、紙の匂い、本が醸し出す全てが大好きでした」祖母も母も美容室を営んでおり忙しく、一人の時間が長かったという市川さん。本と過ごす時間は市川さんにとって当たり前の日常でした。そのため、いつかは本に携わる仕事が出来れば良いな、と漠然とした夢を持っていました。大学卒業後は母の経営する美容室にて美容家として働き始めました。その頃はまた、本に携わる仕事を始めるのは先のことだと考えていましたが、美容家として手応えを感じるかたわらで、変わらず読書をつづけるうちに、本が話題に上る機会も増え、徐々に読書が苦手、最後まで読めない、など本にまつわる相談を受けるようになりました。「私は最後まで読めなくても良いと思います。読みたいと思って本を手にとった瞬間、途中までだけ読んだ時間、その全てが読書であると思っています。もっと気楽に楽しさを感じてもらえたら」話を聞くうちに昔から心の片隅

合った本を、それぞれのコンセプトを大事にしながら本棚を創っていきます。

『岐阜をプレゼンテーションする』をコンセプトにしたカフェでは、すでに並べた本に追加する形で、岐阜ゆかりの作家の作品やオブジェなど本だけでなく空間をデザインした『本棚』を創りました。また、ホテルの一室では、お客様に暮らすように過ごしてほしい、と要望を受けて本を選びました。「面で置いて色の調和を考えました。ホテルには色々な方がいらっしゃいます。その人だけ、その時だけの空間になりますので主張が強すぎて緊張感が生じてしまわないように、本の大きさ、装丁の違い、それぞれのバランスを考え部屋に馴染むような本、たまたまの良の本を選びました」

## ブックシエルフ ディレクション誕生

市川さんはこれからも本を手にとることの楽しさを伝えていきます。選書サービスを続けていくうちに、本棚全体、つまり選書だけでなく本の置き方、そこへ来る人をイメージした空間全てをデザインする仕事が無くなりました。

「図書館や書店には司書さんや販売さんなど、本を選んでくれる素晴らしい選書家があります。私も私しか出来ない「生きた本棚」を創りたい、自分の生業を理解していただくためにもブックシエルフディレクションという言葉を作り出した」

市川さんは、それぞれの空間に



菊川

住所 岐阜市矢島町2-27 那波ビル 2階  
TEL 090-4258-7162  
E-mail kikukawabooks@yahoo.co.jp



ホームページ



「ホテルパーク」の一室



岐阜をプレゼンテーションするカフェ「つくる」の本棚

## 次の一歩へ

市川さんは新たな活動をすでに始めています。それは不要になつた本を募り本棚から自由に、好きな時に本を手にとる機会を提供するマイクロフリーライブラリーと呼ばれる、アメリカ発祥といわれる活動です。本棚から一冊取ったら、別の本を一冊入れる、循環式の図書館です。

きっかけは選書サービスで届いた本を読み終えたお客様が市川さんへ本を返却したことでした。読んだ本は手元に置いておいても仕方ない、でも、古本屋さんへ売却したり、資源回収に出すのは寂しい。「この場所だったら自分が読んだ本を置いて良い」と思える場所があったら嬉しい、という要

選書の方法は独特です。注文集の名前のみの情報から直感でお客様への本を選びます。作家別で並んでいる本棚のある書店ではなく出版社別で並んでいる本棚のある書店で選んでいます。その中でタイトル、装丁の趣、最初の数ページを読んで文庫本一冊を選びます。「自分のために本を選ぶことは得意ですが、内容を熟知した上で相手の希望通りの本をお勧めするスキルは、ありません。この選書の仕方が正しいのか、本当に出来るのか、ビジネスとして成り立つのか、クレームがくるかも、と不安はあったものの、やるならどんとやるう、やってみよう」

市川さんは思い切って一歩を踏み出しました。それが「とある一冊の本」という選書サービスのオンラインショップです。開店の案内はインスタグラムで行いました。毎日読書記録を発信し続けてきた市川さんに期待し、すぐに注文が入りました。「不思議なことに普段自分では選ばない本や今まで気付かなかつた本を選ぶことがほとんどです。すぐに選書できるときもあれば何日もかかることもあります。注文し

望からでした。「私は読んだ本は手元に置き、何度も読み返したいタイプでしたので、そのような考え方もあるのか、とその時に知りました。その方の他にも、自分には、もう必要のないと思う本を手放してくれる人がいるのではと思いました」

手軽に本を入れたり手に取ったりできる場所を自分で作ってみよう、将来的にはあちこちに置きたいと思いつくことが出来ました。三つ目の輪、『社会に求められていること』、その答えがここにありました。

近々、その図書館は自分の仕事場の1階に置く予定です。「無かつたものが出現する、街をふらっと歩いてみると本がある、それも風景になじむように。考えるだけでワクワクします」

街並み、景色に本があることで何か生み出すかもしれない、それは本があればきっと出来る。市川さんは、ビジネスにはならないが、何かに繋がると信じて動き出しました。

街の片隅におかれた本棚みたいな図書館から、岐阜の街を本で豊かにする夢を一歩ずつかなえていきます。小さな図書館が一つひとつ増えることを願って。